

わがまち歴史散歩

江戸時代池田の商人と農作業

○記されなかった
町の商人の農作業

江戸時代、池田村は歴とした町でしたが、それは内実のこと。表向きは村とされ、そこに住む人は「百姓」として年貢も毎年納めていたのです。

では、個々の商人は実際、作物の生産に取り組んでいたのでしょうか。商売だけでも結構大変なのに、農事にまで手を広げるとなると、頭も身体もさらに使わなければならないかもしれません。

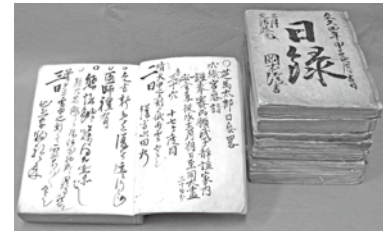
『新修池田市史』第2巻ではこの点について具体的なイメージを伴って記述されるところにまでは至りませんでした。

○「稲束家日記」の
農事記録

池田村の中なか之町ちやうに住み麴もち(甲字)屋の屋号を持つ稲束家は、後世造り酒屋・土地持ち・山持ち・家持ちそれから書画持ちとして知られ、池田を代表する商家でした。同家代々の当主は宝暦6年(1756)以来176冊に及ぶ日記を書き続けており、池田市ではそれを翻刻して『池田市史』史料編④～⑥「稲束家日記」として出版

しています。今回は、この「稲束家日記」のうち

嘉永6年(1803)1



稲束家日記 (歴史民俗資料館蔵)

月当初から5月半ばに至るまでの記事の中から同家の農事記録を引き出すことができました。そこから見えてきたことを以下紹介することとします。

○熱心に取り組んだ
農作業

稲束家の農作業は1月6日「城山谷」でスモモの木を伐り、菜種の肥やしを拵しらえたところから、5月17日水掛りを同じくする地域の田地で一斉に田植えを行ったところまでだけでも延べ55日の日数に上ったことが分かります。

耕作地は「海老屋(や)」「小畑(おわた)」「畑」「兼田」「寺平」「城山」「杉谷」「横丘」などにわたり、菜種・スモモ・麦・たけのこ・レンコン・芋・茶・大豆・いんげん豆・ビワ・わた、そして米と書き上げられています。6月以降までさら

に読み進めてみれば、作物の種類はさらに増えていくでしょう。「クヌギ国木」の記述も注目すべきで、大量の柴にしていることがうかがわれます。

「こへやり」、「こへ拵」などの記述も出てきます。「こへ」とはもちろん、肥料のことです。粕もそのうちに混じっていて、金肥が相当広がっていたことを示しています。だが、古木になったスモモの木を伐って肥やしにするなど、生態系上も興味をそえられる記述もあります。

稲束家は、レンコンなどについては蓮の花を遠方の知り合いに見せて楽しませているように、収益以外の目的を持っているものも存在していたようです。しかし、米と麦はやはり重視していたようです。麦の手入れは怠らず、この年の5月15日には麦納めとして7石4斗を計り、当初の目標よりも1石5斗減であることを指摘しています。その生産目的は何だったのか、個々に検討することが求められているでしょう。

○稲束家に雇われる

人びと

稲束家は、農作業のため14〜15

人の人を使っています。これは、いつも14〜15人という意味ではなく、使用人の範囲が14〜15人という意味です。実際は、6人を同時に使うときもあるし、1人だけというときもあります。繁忙期があり、閑散期もあり、それに対応させたということなのでしょう。

彼らは、生計的には稲束家に隷従していたというよりも雇われていたとみる方が適切なようです。それは名前の横に「半人」といった文字がときどき現われるところから判断できます。仕事の量を量って賃金を支払っていたのでしょう。彼らは町の借家に住んで毎日仕事を探していたものと思われま

す。男性の仕事は、木を伐るといったようなきつい仕事が多く、女性の仕事は麦畑の中の草引きといった、いまならきつい仕事ですが、よく担当させられています。では、稲束家に農事で使われた人は、同家の商活動でも使われたのでしょうか。今後の課題としてこの問題の存在を確認しておきたいでしょう。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)

◆問い合わせは生涯学習推進課

☎754・6674